

大学昇格運動

昇格か廃校か

大正7(1918)年、「大学令」の公布によって単科大学が認められるようになり、大正9年に東京高商の大学昇格が実現した。東京・広島の両高等師範や神戸高商など5校の大学昇格案が報じられ、長崎高商・小樽高商には専攻科設置という噂が立った。

この動きに山口高商生も鋭く反応し、大正9年11月29日、400名余の生徒が亀山公園に結集し学生大会を開催した。「吾人は本校の昇格を期す」と決議し、「昇格か廃校か」のスローガンの血判状に名前を連ね、旗を押し立てて上田鳳陽の墓に詣でた後、町内をねり歩き、山口町民に訴えた。さらに実行委員10人が決議文を携えて上京した。その後もデモやビラ配りを繰り返し、有力者への協力要請を行った。この最中、数日間授業は休講。生徒側の熱烈な運動に学校側も触発され、「商科大学に昇格し、法学部を併置して総合大学とする」という「防長大学設立趣意書」をまとめて横地校長・鷲尾教授が上京した。

大学昇格運動には、学校・学生・同窓会・県・町・県出身有力者など関係者全員が参加し、東京には期成同盟会が置かれ、県を中心とした運動が展開された。新聞紙上でも運動が報じられ、世間の注目を集めた。



「昇格か廃校か」と書かれた旗を掲げ町内を行進する生徒たち

幻となった防長大学

運動は激しさを増し、文部省もその対応に苦慮した結果、大正11年に東京・大阪に工業大学、東京・広島に文理科大学、神戸商業大学の5大学の昇格を認め、山口高商以下16の専門学校に専攻科を設置するとして予算案を議会に提出したが不成立となった。

翌年、専攻科を研究科に変えて議会に提出し承認されたが、関東大震災による財政難で設立は見送られた。昭和4(1929)年になって神戸商業大学などの5大学の設置が行われ、山口高商も大学の新設を目指して運動を継続したが、ついに実らなかった。

運動が激しかっただけに関係者の失意、特に学生の落胆は大きかった。しかし、学生も学校も挫折に打ちひしがれてばかりではなかった。将来的に大学に昇格するため、十分な研究体制を構築するべきとの機運が高まり、学生は自主的に「商学研究会」を結成。続いて、学校の組織的な研究調査機関として「調査部」が発足した。